

『朝鮮文朝鮮語講義録』の発音法に関する 二つの記事の内容分析

—学習書の分類基準を定めるために—

呉 大 煥

はじめに

1. 構成の比較
2. 母音の記述
3. 二重母音の記述
4. 子音（初声）の記述
5. 平音—激音—濃音の対立の記述
6. 終声（パッチム）の記述
7. 所謂「音の変化」の記述
8. 学習書としての特徴

おわりに

はじめに

1920年代の朝鮮半島では、朝鮮総督府の政策により、内地から朝鮮に赴任した警察官などの官吏を対象にする「朝鮮語教育」が活発に行われていた。この時期を境目として、朝鮮語教育にさまざまな変化が現れ、教育活動や学習書も進歩していったと思われる。この時期の状況を明らかにするには、朝鮮語の学習書の発刊や講習会の開催などの朝鮮語教育に携っていた団体として「朝鮮語研究会」¹⁾に注目する必要がある。

この団体は、1924年9月から1925年9月にかけて『朝鮮文朝鮮語講義録』という雑誌を刊行した。また、その雑誌の刊行が完了された後は雑誌に連載された内容から重要なものだけを抜粋し、製本した、同じ題目で三巻構成である『朝鮮文朝鮮語講義録』の合本版も発刊された。この雑誌と合本の二つの形で発刊された『朝鮮文朝鮮語講義録』の中には、初心者向けの朝鮮語の発音に関する記事が二つある。一つは「朝鮮語発音及文法」（以下「文法」と称す）の「諺文の発音」の部分であり、もう一つは「朝鮮語会話」（以下「会話」と称す）の「諺文」の部分である。雑誌から合本にする際、ある程度の編集過程があり、記事の入れ替えなどが行われ、合本には異本がある。雑誌にはあったが合本に掲載されなかったり、版本によって除かれたりした記事もあるが、なぜか「諺文の発音」という内容に関してはすべての合本に上記の二つの記事が掲載されている。

本稿では、この二つの記事の内容を分析し、発音に関する記述の相違点を明らかにすることを目標とする。この相違点が明確になると、当時の朝鮮語の発音教育の状況が把握でき、さらに、その相違点が発音教育用の学習書の分類基準となると予想される。

今回分析・考察の対象にしたのは、色々な合本版の中、韓国で影印された亦楽出版社の

合本『朝鮮文朝鮮語講義録』上巻に載っている記事である。

1. 構成の比較

「文法」と「会話」における発音に関する内容を、両記事の目次を整理してみると次の通りである。

表1 目次の比較

「朝鮮語発音及文法」：諺文の発音		「朝鮮語会話」：諺文	
1. 中聲（母音）	（1～3頁）	1. 母音	（1～3頁）
2. 初聲（子音）	（3～15頁）	2. 子音	（6～9頁）
3. 終聲（子音）	（15～22頁）	3. 綴方	（9～14頁）
4. 重終聲	（22～23頁）	4. 詰音	（15～16頁）
5. 重中聲（其一）	（23～24頁）	5. 音の変化	（16～23頁）
6. 重中聲（其二）	（24～26頁）		
7. 重初聲	（26～28頁）		
8. 発音上注意すべき要点	（29～30頁）		
9. 轉音	（30～40頁）		
10. 高低音	（40～42頁）		

目次から読み取れる両記事の違いは以下の通りである。

「文法」は、母音関連の4つの節と子音関連の4つの節でハングルの発音について説明しているが、「会話」は、母音と子音と詰音という3つの節にわたって文字の発音について説明をしている。「会話」には朝鮮語の音節の特徴である終声の表記に用いられる子音字については別の節がたてられているわけではなく、日本語より数が多い二重母音に関しても言及されていない。「会話」では二重母音の‘ㅑ、ㅓ、ㅕ、ㅗ’以外の二重母音については説明せずに、「綴方」の諺文表の中で表記と発音を提示しているのみである。

また、「会話」にはないものの、「高低音²⁾」という節が「文法」には別途に置かれている。「高低音」というのは、母音の長さという超分節音素のことで、他の学習書には含まれていない学習項目である。このような母音の長さは当時の京城語における語彙の特徴ではあったが、現代の韓国語と同様にその重要性は衰えていたようである³⁾。しかし、「文法」は必要な学習項目として取り上げている。

他に、現代の発音教育と違う点は、「重初聲」と「詰音」という濃音に関する節が独立されていることである。現代は濃音と言われる音について別の節になっていることから、当時の発音教育は、朝鮮語の音中心の教育よりは表音文字であるハングルの各文字の音価を中心に教育することが主な教育目標であったということが分かる。両記事の前書きにも書いてあるように、「朝鮮語の発音」よりは「諺文の発音」を教えているということである。

2. 母音の記述

両記事の学習項目として最初に母音について説明していることが目を引く。ハングル文

字の順番は母音の‘ア行’から始まる仮名の順番とは異なり、子音が最初に出ることが普通だと思われた時期であったが、両記事とも母音についての説明を第一に提示している。この点は現代の教材に近いと評価すべきことであると思う。なぜ母音から提示するかは、韓国語において子音は単独で発音されずに常に母音との音節で発音されるものであるということと、音節の核になるのは母音であるからである。「会話」には母音についての説明を最初に提示した理由については記述されていないが、「文法」には‘発音の便宜上’という記述があるため、文字の順よりは発音の成り立ちを念頭に置いて提示の順番を決めたことが推測できる。

ここで、母音に関する両記事の記述を検討すると、まず、提示されている「母音」は、単母音字7つとイ系二重母音字4つの、合わせて11個の母音字である。その提示順だけを見ても、わずかではあるが、発音法に関する提示の違いが見られる。

「会話」は、下記のように母音字の提示とともに発音を片仮名で提示している。

ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	ㅡ	ㅣ	·
アー	ヤー	オ(ウ)	ヨ(ユ)	オー	ヨー	ウー	ユー	ウー	イー	アー

「文法」では、単純に母音字だけを提示している。この記事では一貫して「会話」のようにハングル文字にカタカナの読みを付けて発音練習をすることを禁止していることは非常に興味深い。「文法」の提示順は次のようである。

ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ ㅡ ㅣ ·

しかし、「文法」では発音法の説明では以下のように順番を変えて説明している。

ㅏ ㅑ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ ㅣ · ㅓ ㅕ ㅡ

提示順と説明順で順番を変更した理由については別に説明がないが、恐らく学習者の母語の特徴を配慮して、説明と学習の便宜をはかったためではないかと思われる。つまり学習者の母語である日本語の母音に似て、発音しやすい音を優先して提示し、その後韓国語に特徴的な母音の発音を説明しようとする意図があると考えられる。

各母音字の発音法に関する記述は、両記事の特徴が見られると思われるので、その詳細を見ておこう。「文法」の提示順を「会話」の順に合わせて比較してみたい(表2)。

表2 母音の発音の説明

(「朝鮮語会話」(上段)と「朝鮮語発音及文法」(下段))

(一) ㅏ 口を開き咽喉の奥より軽く「アー」と発音すべし
ㅑ 「ア」と同じく口を充分に開けること
(二) ㅓ ㅣ (イー)とㅏ (アー)の合音「イヤー」なり普通「ヤー」と発音す即ちㅏと同じく口を開けて軽く「ヤー」と発音すべし
ㅕ 「イ」と「ア」を合わせたもので「ヤ」と同じく発音すること